

14

日本的様式の探求と光と影の造形

「距離」=「時間」=「空間」

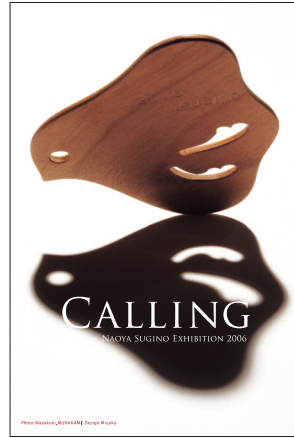
**Search for Japanese style,
forming of light and shadow**

"Distance" = "Time" = "Space"

デザイン学科・助手

Department of Design • Research Associate

杉野 直也 Naoya SUGINO



[fig.01] Exhibition 2006 DM



[fig.02] Exhibition 2007 DM

2002年「九十九の一⁰¹“first of 99”」制作、2004年2人展「No.1/1」発表後、同年、個展「不可知」⁰²発表。「九十九の一“first of 99”」は形状として「花型(チューリップ)」を用い、オーナメントオブジェとして大量数制作する。

「人間には同じ形状のものが多数あっても

その中から一つを見極める性質がある」

その考えに基づき、大量の花型を、一つ一つのディテールが異なる様、手作業による制作手法をとる。一見同じ形でありながら、微妙に異なる形状とした。

以降、位相形態⁰³による、造形表現を模索する。

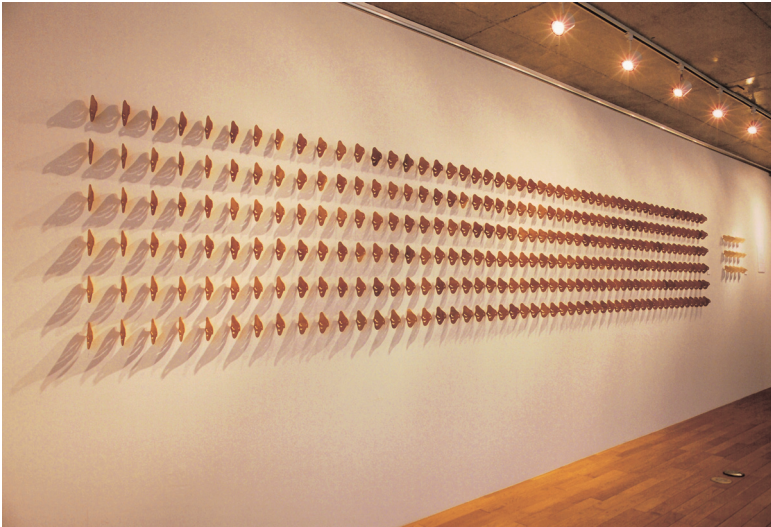
「無い」と言う事の「存在」を表現する

2006年個展「CALLING」を発表。[fig.01]

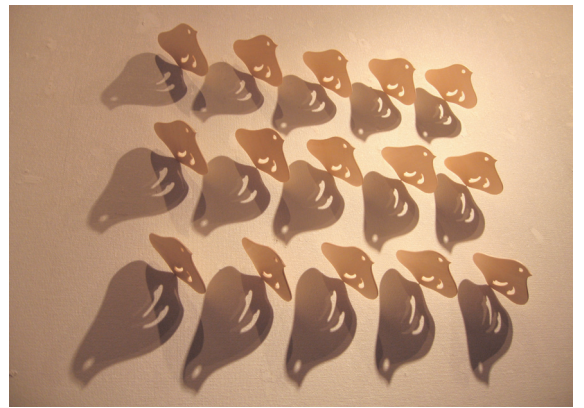
「CALLING」を発表するにあたり“日本を代表する、古くから馴染みのあるカタチ(モチーフ)”として「千鳥」⁰⁴を使用する。日本人の心の中に擦り込まれている様な、どこかで見た懐かしい情景を、千鳥を媒体とし、覚醒させる効果を狙う。量産された作品を整然と並べる事により、鳥の羽音が聞こえる様な情景の演出を試みた。前回と違う点は、素材を薄い木片にしたことである。これは実態を見せずに影の存在のみで造形を示す事を目的としている。よりシンプルに伝える為に、余計なものを排除した結果、生まれた造形である。[fig.03][fig.04]

2007年個展「CALLING 2」発表。[fig.02]

木を素材の中心として2002年から制作してきたが「CALLING」発表時に試験的に金属(銅板)を使用。鏡面に仕上げる事で影の意識から「光と影」を映し出すことを意識した作品制作に入る。[fig.05]自身初の金属(casting)制作発表。「量で見せる位相形態作品」「光と影」を合わせ持ち、且つ「量から単体表現への移行」「屋外展示可能な作品」をテーマに制作発表とした。[fig.06][fig.07]



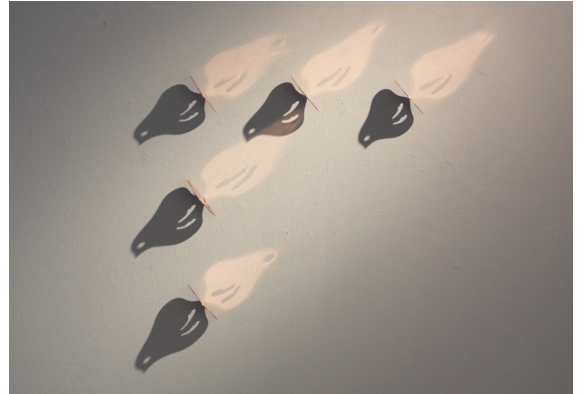
[fig.03] Exhibition 2006 (section)



[fig.04] Exhibition 2006 (section)



[fig.06] Exhibition 2007 (section)



[fig.05] Exhibition 2006~2007 (section)



[fig.07] Exhibition 2007 (element)

脚注

- 01 『九十九の一』を『つくものはじめ』と読む
- 02 人知では知ることができないこと。また、そのさま。
- 03 『位相形態』という言葉は作者の造語。
位相: 解析学で、極限や連続の概念を定義できるように、抽象空間(集合)に与えられる適当な構造(部分集合)。トポロジー。地域・性別・年齢・職業・階層や、書く場合と話す場合などによって、言葉の違いが起こる現象。
- 04 チドリ目チドリ科の鳥の総称。約60種が南極を除く世界中に分布。くちばしは短く、足の指はふつう3本。海岸や河原で、少し歩いては地をつついてえさをとる。イルカチドリ・シロチドリ・ケリ・コチドリなど。たくさんの鳥。いろいろの鳥。ももどり。ももちどり。

参考文献

- 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉)
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』